

男女共同参画推進委員会副委員長対談

## 早稲田大学における男女共同参画への課題

矢口徹也（教育・総合科学学術院教授）× 桜井直子（学生部事務副部長）

### ワークライフバランスについて

**矢口** まず、自分の話をします。15年前に体調を崩して生活を見直し、好きだったお酒をやめたのが転機のひとつとなりました。禁酒してみると、自分の中で何かがぽっかり空いた感があり、習慣、依存の恐ろしさを知りました。実は、その空白を埋めてくれたのが、洗濯、掃除などの家事であり、今でもこれにすっかりはまっています。特に洗濯は、ストレスがたまった時のリセットに効果があります。

30代までの自分の不摂生が原因なので、負け惜しみかもしれませんが、40を前にして自分の生活を見直すいい機会になりました。

**桜井** 就職した頃は言われるままに残業していましたが、結婚し子ども2人を育てたので、その意味でワークライフバランスはとってきました。でも、今思うと125周年の頃は土日の出張や残業が多く、仕事中心の生活になっていました。子育てが終わって時間の制約がなくなったからでしょう。

**矢口** 女性管理職を増やすという目標ですが、大学業務の性格上、学内外で遅くまで、不規則に働く職員も少なくありません。現状で、女性は管理職になることをどれだけ希望しているのか、また、多くの男性管理職のような働き方を見直すことは可能でしょうか。

**桜井** 小さい子どもをもつ女性が管理職にと言われた場合、躊躇するかもしれません。

**矢口** 女性も男性も、育児、さらに最近は介護を担う教職員が多くなっている。同じように働くのは大変で、みんなで課題を理解していくことが重要になってきていますね。

**桜井** 男性でも、共働きや介護を経験した人は実体験として理解できるでしょうが、そうでない人にわかってもらうのは難しいかもしれませんね。

**矢口** 社会全体で、管理職になりたがらない20代30代が多いという話も聞きますが、早稲田でもそうだとすれば、管理職の役割、待遇、しくみを改善することは可能でしょうか。その上で、もし、男女間で明確な格差があるなら是正しなくてはと思います。

**桜井** 早稲田でも、最近は時間外労働削減を言われていることもあってか、早く仕事を終わらせて帰ろうとする若いパパが増えていっているらしいです。昔は「残業＝仕事している」と言われたので残業の方が気が楽でした。でも決してそうではなく、限られた時間しかない人ほど効率を考えて仕事をしていると思います。こういう人たちが管理職になって、ワークライフバランスのとれた働き方のお手本を見せることで、メリハリをつ



▲矢口副委員長

けた働き方が浸透していくのではないのでしょうか。

**矢口** 「仕事」と「生活」との間に、こんな問題や課題があり、先輩たちはこんな風にクリアしてきたということ、学生を含めた若い世代に伝えていかなければなりませんね。

### 推進室ができて変わったこと、変わるべきこと

**矢口** 125周年の時に「早稲田大学男女共同参画宣言」を発表して推進室をつくったことは、大きなステップになったと思います。組織や制度がつくられることで動くこともあります。

**桜井** サポートセンターができて、相談や搾乳ができる場所ができたことも、形として見える大きな貢献ですね。

**矢口** 早稲田の共同参画の動きは科学技術振興調整費の受託がひとつの契機になりました。ただ、これからは、政策、社会の動向とは別に、早稲田独自の考えを示す必要を感じます。かつて、大隈重信が日本女子大の創立準備を行い、高田早苗が女性の大学入学に道を開こうとしたことは、誰に言われたことでもない、早稲田らしい進取の精神でした。「早稲田は未来にむかって、これをします」とアピール出来る何かを、ひとつ打ち出せないか、そのためには総長のリーダーシップを進めていく組織が必要かもしれません。

**桜井** そうですね。国立大学の成功例では、やはり学長直轄組織が学長特別枠でまず女性教員を増やしています。なぜ女性を増やす必要があるかということですが、この先の多文化共生社会では、異質なものを尊重することが大切です。女性が異質というと語弊がありますが、従来型の男性中心の職場では新たな発想は生まれないと言われていています。大学こそ率先して女性を登用すべきではないのでしょうか。職員についても、早稲田には管理職と一般職の2種類しかないのかと言われたことがあります。企業のように、一定期間毎に客観的な基準の試験に合格した人に役職を与える制度があれば、女性も管理職候補生として育つのでは。育てようとする意識としくみが大切だと思います。



▲桜井副委員長

### 学生や後輩のために

**矢口** 2000年の『AERA』に「Wの悲劇―『早稲女魂』ゆえに結婚できない人たち」という記事が書かれた。3年後、『負け犬の遠吠え』が話題になりました。その頃から、「将来は主婦に」と口にする女子学生が現れてきました。彼女らの親世代は、男女平等や機会均等を意識してきた世代だと思います。しかし、その親を見て育った娘世代から「頑張ったのはわかるけれど、お母さんを見ていて、幸せそうに見えない」との言葉が

あった。それが、「女性が頑張ってもしょうがない、何も変わらない」につながることを危惧しています。

早稲田の女子学生は概ねペーパー試験でもプレゼンでも優秀なのですが、近年、諦める傾向も見えてくる。そこで、授業では、女性像は政策、メディアによってつくられることを話しています。例えば、戦時中は女性の協力、参画が奨励されるのに、戦後に男たちが帰還すると、「女性は家庭」のキャンペーンが行われる。だからこそ、女性は、惑わされることなく自ら学び、考え、判断することが大切。もうひとつ、やはり、学生にはロールモデルを見せる必要があると思います。親だけでなく、先輩たちはどんな時、どうやって課題を乗り越えてきたのかを見てもらう必要がある。そこで、この4月から、仕事と生活の「両立」の問題解決にむけて、学生自身が企画して、自分たちで気づいていける、そんなプロジェクト型の授業を計画しています。

桜井 私の頃、今の学生の親御さんより少し上の世代ですが、子どもができたなら女性は家庭に入るのが当たり前の時代だった

たので、外で働き続けることは大変でした。今は、社会環境も早稲田の制度もかなり良くなっていますが、一方で仕事内容や職場環境は大変になっている部分もあります。良くも悪くも子どもを育てながら働き続けた自分の経験を、若い職員のために少しでも役立てられるよう、推進室の活動に携わっていきたいと思います。



▲2012年1月11日 大隈会館にて

## 東日本大震災

### —3.11その時、なにが起こったか—

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、東北地方を中心に広範囲にわたって甚大な被害をもたらし、首都圏でも、建物の損壊、液状化被害、電車や地下鉄の全面運休などにより大混乱に陥りました。あの日、仕事と家庭の両立に挑戦していた教職員にはどんなことが起きていたのでしょうか。仕事と家庭の両立には、職場の制度や環境も重要ですが、個人や各家庭での十分な備えも必要です。将来、起こり得る災害の備えに、教職員みなさんの体験談をお役立てください。ここに掲載できなかった体験談は、推進室ホームページ([http://www.waseda.jp/sankaku/about/newsletter\\_more.html](http://www.waseda.jp/sankaku/about/newsletter_more.html))でも紹介しています。

当日は、職場で勤務中。すぐ気になったのは子どもたちの事。娘の保育園の対応は息子の時の経験で予想できたので、心配は、放課後学童クラブで過ごしていた息子でした。普段は自宅近くで勤務の妻も、この日は運悪く都心勤務。業務の合間に学童クラブにかけ続けた電話は16時頃やっと通じましたが、「子どもは帰宅した」との衝撃的な返答。大学に残るつもりでしたが、上司の許可を得て、すぐに稲城市の自宅まで徒歩で帰る決断をしました。結局、学童クラブの方が自宅へ見に行ってくれ、近所の家に保護されている旨のメモが玄関に貼ってあるのを見つけ、大学の事務所経由で無事の連絡が私に届いたのは、足の裏の皮がヒリヒリ痛み出した21時頃。子どもの所在が分からなかった5時間は生きた心地がしませんでした。

専任職員(男性)

シングルマザーで、両親は長野にいるため頼れない状況でした。震災当時は研究室勤務で1人だったので世の中の状況が分からず、以前練習したことのある災害伝言板で弟と連絡を取って情報を得ました。たまたまメールが使えたので、同じマンションの娘の同級生のお母さんに連絡を入れたところ、小学校側が引き渡しではなく全員下校させたこと、彼女が娘を預かってくれていることが分かり、板橋の自宅まで徒歩で1時間半かけて帰宅しました。都電を大塚までと、池袋から自宅まで歩いた経験があったため、道は分かっていた。コンビニで水とカイロとチョコレートを購入して出発しましたが、1時間半の距離では使わず、それ以上にトイレ対策が必要と感じました。

常勤嘱託職員(女性)

年明けに母が体調を崩して入院し、震災はその退院直後でした。私は母と2人暮らしで、地震が起きた時は家には母しかおりませんでした。自宅は川崎市のマンションですがあまり近所づきあいがなく、退院後も母はほぼ寝たきりだったため、安否が気になりました。地震発生直後から電話には発信制限がかかり連絡の取りづらいう状態が続きましたが、夕方には母の携帯電話に繋がり無事を確認できました。本当はすぐに帰宅したいところでしたが、その後も余震が続き、交通機関もマヒしていたことから当日の帰宅は諦め、翌朝、電車の運転が再開されてから帰宅しました。

専任職員(男性)

On the afternoon of March 11, I was in my Waseda office with a colleague, while my wife was at home (not working that day) and our two children, both at different international high schools. My most immediate concern was to make contact with my wife and to ascertain the situation with our children. We were able to communicate by internet, and later by landline (payphones) as I walked home. After about 30 minutes of not being too sure what to do, I decided to walk home; I was glad that I had made that decision at an early point as it became more and more crowded later. My walk home took a little under 5 hours; it would have been quicker if I had had a walking map with directions. Our son had also walked home from school, but our daughter had to spend the night with a family close to her school. We had good communications with the schools from the early evening, so we felt fairly comfortable with the situation. We were also very grateful for the helpful information we got from friends and neighbours in the following days.

専任教員(男性)



## イクメンによるワークライフバランス講座 「ファザーリングが社会を変える!」を開催しました



2011年10月21日、NPO法人 Fathering Japan 代表理事の安藤哲也さんをお招きして講演会を開催しました。自らが立ち上げたFathering Japanの活動や3人のお子さんの父親でいらっしゃるイクメン体験を交えたお話に、参加者のみなさんは熱心に耳を傾けました。講演会終了後のアンケートでは「イクメンが多くなることで女性がいかに活躍できるかということが新しい気づきだった」「今まで、仕事と育児の両立は難しいと思っていたが、少し希望を持てた」「子育てしながら働きたいと思った」(以上、学部女子学生)、「ファザーリングが家庭だけでなく地域や仕事のスキルの問題解決や向上に関わりあっているのにはハッとさせられた」「これからはイクメンのようなスタイルが普通だと誰しもが思える社会になって欲しいし、していきたいと思った」(以上、学部男子学生)などの感想が寄せられました。

この講演会の模様は、Course N@vi の「男女共同参画推進室提供講座」としてオンデマンド配信しています。ぜひ、ご視聴ください。



▲熱心に聞き入る参加者

### 利用者の声 母乳育児と仕事の両立

商学学院非常勤講師 金スノグ

2010年末に第2子を出産、翌4月から非常勤講師に復職しました。第1子の時同様、保育園に預けながら母乳育児を続けたいと希望しておりましたので、授業のある教室と同じキャンパスに搾乳室が開設されたのは本当にありがたく、すぐに利用を申し込みました。思えば2005年に第1子を出産し翌4月に復職した際は、大学構内で搾乳ができる部屋を探すのに奔走し、周囲のご厚意でようやく一室をお借りして幸い搾乳は続けられたのですが、教室からそこまで片道10分の道のりはなかなか大変でした。現在は昼休みと授業後にゆったり搾乳できるよう

授乳兼搾乳室は、早稲田キャンパスと西早稲田キャンパスの2箇所にあります。搾乳室についてはその他のキャンパスについてもご案内できますので、男女共同参画推進室までご相談ください。

になりました。0才から保育園に預けていると、初めから母乳育児を諦めてしまう方も多いと聞きます。赤ちゃんの成長ももちろん大切ですが、産後1年を待たずに復職する女性の健康的な回復には、一定期間以上の母乳育児は必要ということもあります。こうした施設が一層普及し、母乳育児と仕事の両立が当たり前になる日が近づくよう祈っております。



▲相談室兼搾乳室(早稲田キャンパス10号館213 男女共同参画推進室内)



▲授乳兼搾乳室(西早稲田キャンパス60号館214 ワークライフバランス・サポートセンター内)

### 活動報告

第3期委員会の委員・部会委員の任期:2011年10月21日~2013年10月20日 氏名は50音順、◎委員長 ○副委員長 ◇部会長

#### 男女共同参画推進委員会

2011年10月21日に、現在の第3期目に引き継ぎました。第1期、第2期と、積み上げてきた男女共同参画の基盤をもとに、2018年度達成を目標とした「男女共同参画基本計画」の実現に向けて、一層取り組んでまいります。

**委員** 石山敦士(研究推進部長/理工学術院教授)・大野高裕(教務部長/理工学術院教授)・◎川田宏之(理工学術院教授)・齋藤美穂(男女共同参画担当理事/人間科学学術院教授)・○桜井直子(学生部事務副部長)・迫田実(人事部長)・世倉和幸(学生部長/政治経済学術院教授)・清水敏(人事担当常任理事/社会科学総合学術院教授)・田中愛治(教務総括理事/政治経済学術院教授)・月田陽子(広報課職員)・深澤良彰(研究推進部総括理事/理工学術院教授)・松岡宏高(スポーツ科学学術院准教授)・村田晶子(文学学術院教授)・守田芳秋(総務部長)・○矢口徹也(教育・総合科学学術院教授)

#### 教育研修部会

2011年10月、前年に引き続き、ワークライフバランス講座を開催しました。男性の育児参加によるワークライフバランスの実践について知る良い機会となり、大変好評でした。「女性しごと・ライフデザイン」等の授業については、より一層、問題や関心を深める機会となるような工夫をしていきたいと考えています。

**部会委員** 生駒美喜(政治経済学術院教授)・白井由美(キャリアセンター留学生支援担当課長)・膳場百合子(理工学術院准教授)・高松敦子(理工学術院教授)・中村采女(理工学術院教授)・畑恵子(社会科学総合学術院教授)・◇矢口徹也(教育・総合科学学術院教授)・弓削尚子(法学学術院教授)・米内達也(教育システム課職員)

#### 制度環境部会

本学の構成員の仕事と育児や介護の両立など学内の男女共同参画実現の課題に、当事者としての目線で取り組み続けていきたいと思います。とりわけ女性の専任教員、職員管理職増員、キャリア初期研究者の支援等について、各学術院、人事部と懇談を重ねています。

**部会委員** 阿古智子(国際学術院准教授)・浅倉むつ子(法学学術院教授)・大庭慎二(メディアネットワークセンターマネージャー)・川島いづみ(社会科学総合学術院教授)・北川佳世子(法学学術院教授)・桜井直子(学生部事務副部長)・志熊万希子(学生生活課職員)・棚村政行(法学学術院教授)・◇村田晶子(文学学術院教授)

#### 広報調査部会

今年度は「さんかくニュースNo.7」の発行のほか、英文ポスターや配布対象別リーフレットの新規作成、「留学生ハンドブック」への新たな情報掲載および「CAMPUS NOW 錦秋号」の男女共同参画特集への協力などを行いました。今後も、学内広報物やホームページを通して、男女共同参画やワークライフバランスの啓発と情報提供に努めます。

**部会委員** 石原剛(教育・総合科学学術院教授)・崎山裕子(教務部調査役)・笹渕洋子(図書館総務課職員)・嶋崎尚子(文学学術院教授)・城座俊輔(政治経済学術院職員)・田辺茂雄(理工センター技術部教育研究支援課(四系)職員)・◇月田陽子(広報課職員)・余語琢磨(人間科学学術院准教授)・吉野亜矢子(教育・総合科学学術院准教授)

#### サポートセンター部会

2011年度後期は、新体制が発足し、これまでの経緯と現状を確認したうえで、2012年度事業計画について意見交換を行いました。相談業務については、昨年度と同等数の相談への対応に加えて、ランチョントーク&ミーティング in 所沢キャンパス「研究・学業と子育ての両立」などの交流事業を積極的に行いました。

**部会委員** 川名はつ子(人間科学学術院准教授)・越川房子(文学学術院教授)・小西麻知子(学生生活課職員)・後藤勝博(所沢総合事務センター職員)・所千晴(理工学術院准教授)・◇松岡宏高(スポーツ科学学術院准教授)・細井肇(理工センター技術部教育研究支援課(二系)課長)

## 快適な育児をイメージしていたら研究職に

小さい頃から凝り性でした。4歳から始めたピアノに熱中し、ピアニストになりたいと思い毎日練習をしていました。ピアノにかかわらず、面白いと思ったことは、部活でも行事でも、何でも夢中になるタイプです。ピアニストへの夢は高校の時に断念しましたが、その後は特に何かの職業に就きたいと思っていただけではありませんでした。大学に入れば熱中できることが見つかるかもしれないと思って受験勉強をしましたが、大学に入った当初は、何のためにあんなに勉強をしたのだらうと思ったこともありました。きつと良いところに就職するためだったのだらうと結論づけ始めた4年生になって、卒論研究のあまりの面白さにすっかり魅了されてしまいました。その後、修士と博士、そしてポスドクの1年間は東大で過ごしました。東大での研究生活は楽しいだけの毎日ではありませんでしたが、研究者としての考え方の基礎を学ぶことができました。

一方で、小さい頃より家庭を持ち、子どもを育てたいという強い意志があったようです。ちょうど、このお正月に倉庫の整理をしたところ、「大人になるということ」という題目の小学校の頃の文集が出てきましたが、他の友達が「サッカー選手になりたい」「看護婦さんになりたい」と書いている中、何と私は「立派な大人になって子どもを育てたい」と書いていました。この事には私自身も驚きました。振り返ってみれば、高校や大学の間に何か特定の職業に憧れていたわけではありませんが、家庭を持って子どもを育てるということが、より快適に実現できる職業に就きたい、というイメージは何となく持っていたように思います。

## 両立の困難はキリがないけれど、喜びも大きい

東大でポスドクの時に出産した小3の息子と、早大で専任講師の時に出産した3歳の息子の2児の母です。ここまで毎日が困難の連続だった、と言われればそのような気もしますし、何とかやってこれたのだから大したことではなかった、と言われればそのような気もします。過ぎてしまった困難より、現在の子どもの成長に対する喜びの方が大きいということなのだと思います。

日常的な困難は、とにかく時間が足りないことです。1人目を出産した直後は、時間さえあれば片付く仕事が山積みになっていくことに、大きなストレスを感じました。今ではそれが当たり前の状態です。人間にはスト

レスや困難に立ち向かう力が、ある程度備わっているのだと思います。子どもが急に病気になった、といった非日常的な困難も数え上げればキリがありませんが、両親にも助けてもらいながら、これまで何とかやってこられました。

## リフレッシュはピアノで

ピアノを弾きます。毎日時間に追われているため、一瞬でも自分だけのために時間を使うことができた、という気持ちが一番のリフレッシュになります。

## 後輩へのエール

何よりも大切なことは、自分に一番合った生き方を見つけることだと思います。そのためには自分の適性を客観的に把握することです。私は、たまたま仕事と家庭とを両立させることに心地よさを覚えるタイプであったため、このような進路選択をしました。その分、失っているものもあると思います。各個人に合った多様な生き方や働き方を実現できるような受け皿作りが、少しずつ社会でも進んでいると実感していますので、何もあきらめる必要はありません。貪欲に、心地よい生き方を追求してほしいと思います。



## 略歴：

2003年 東京大学大学院工学系研究科地球システム工学専攻修了。博士(工学)取得。

2004年 早稲田大学理工学部環境資源工学科助手。

2007年 早稲田大学理工学術院(創造理工学部環境資源工学科) 専任講師。

2009年 同准教授。現在に至る。

専門領域：資源循環工学、粉体工学、ミネラルプロセッシング。

家族構成：夫、息子2人の4人家族。

## 「学生・教職員用託児室」が移転しました！

2011年5月、早稲田キャンパス27-9号館(どらま館)1階に一時預かり専用の託児室として開室した「学生・教職員用託児室」が、2012年4月1日に同キャンパス99号館(STEP21)1階に移転しました。学業や研究活動、仕事と子育ての両立を目指す学生・教職員のお子さんを、より広く、閑静な環境でお預かりします。なお、利用の際は、事前の利用登録が必要です。詳しくは学生生活課URLをご参照ください。

<http://www.waseda.jp/student/kosei/takujishitsu/>

【問い合わせ】学生は学生生活課、教職員は給与厚生課まで

STEP21の入口▶

リーフレット  
配布中

「いざという時のためのワークライフバランスサポート案内」と専任教職員用『早稲田でも進めています男女共同参画』の2種類があります。ご希望の方は、右記推進室までご連絡ください。



## 募集しています

- 「さんかくニュース」について、さらには早稲田大学における男女共同参画推進について、ご意見や話題がありましたら、右記までお寄せください。
- ワークライフバランスのロールモデルとなるような教職員・学生をご紹介ください。



編集・発行

早稲田大学  
男女共同参画推進室

【早稲田キャンパス】

TEL: 03-5286-8572

FAX: 03-5286-1429

【西早稲田キャンパス】

TEL: 03-5286-8497

FAX: 03-5286-8498

e-mail: [sankaku-office@list.waseda.jp](mailto:sankaku-office@list.waseda.jp)